

## 「死者と遺族の思い」

刑事部捜査第一課（男性）

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時46分、ドーンと突き上げるような突然の衝撃に続き長時間の大きな揺れ、それはこれまでに経験したことがない恐怖を覚えるほどのものであった。

宮城県の太平洋沖を震源とした未曾有の大震災発生当日の深夜、警察庁から埼玉県警察広域緊急援助隊刑事部隊に対し、被災地岩手県釜石市への出動命令が発表された。最低限の装備資機材と食料を積み、発令直後の深夜、車両 3 台に分乗し、警察本部を出発した。

検視場所に指定された中学校は、平成12年に廃校となった校舎で、沿岸から離れた小高い場所にあった。窓ガラスの割れた薄暗い体育館には、床一面に青色ビニールシートが敷かれ、現地の警察官が既に収容された御遺体の検視を行っていた。我々は、前日から不眠不休で活動している警察官の助けになればと、到着直後から検視班 2 班と遺族支援班に分かれて活動を開始した。電気もなく水も出ない体育館で、ほとんどの御遺体が全身泥や油にまみれている状況での作業は、想像をはるかに超える大変なものだった。

我々は、御遺体の衣服も遺族にとっては大切な遺品であるとの思いから、1 枚 1 枚丁寧に脱がせ、バケツ半分くらいの貴重な水を使い御遺体の損傷や身元特定の資料にもなりうる手術痕など、その人固有の特徴を 1 つ残らず確認記録するため、何回も何回もタオルで拭きながら作業を続けた。

検視場所には仕切りがなく、我々のすぐ近くで御遺体と対面し泣き崩れる御遺族や、必死に家族を探し求め、検視をしている最中の御遺体までも直接確認する御家族を目の当たりにした。我々にできることは、「1 体でも多くの御遺体をできるだけ綺麗にして、少しでも早くご家族の下へ返して上げること。」であると考え、夜通し車を走らせて現地入りした疲れも忘れ、隊員たちは皆ひたすら検視を行った。そんな中、「顔が綺麗でよかった。」と、泣きながら検視を終えた御遺体と対面しているご家族がいた。その言葉を聞いたとき、自分たちの仕事は、御遺族の元に返してあげたいという気持ちをより強くした。

我々が検視をした中には、生後数箇月の赤ちゃんや小学校入校間近の女の子の御遺体もあり、同じ年頃の子供を持つ隊員は、涙をふきながら検視を行っていた。また、現地の遺族班の中には、奥さんが行方不明になったままであるにもかかわらず、遺族支援に従事している警察官もいた。

地震発生から 4 日目の 3 月14日、警察本部から第二次部隊との交替の知らせが寄せられた。しかし、限られた食料と狭い車内での連泊という過酷な環境での任務にもかかわらず、皆『まだ、ここでごんばります。帰りたくありません。』

と訴えた。被災者の心情と現地警察官の苦労を肌で感じ、チームワーク良く共に活動してきた隊員の言葉に胸が熱くなった。

任務を終えた我々が帰県する頃には、体育館は御遺体でいっぱいになり、その光景を見たとき、検視をした御遺体の『無念の死』を訴えているような苦しげな顔が次々と浮かび、早く家族の元に帰れますようにと合掌し体育館を後にした。

人の役に立つ仕事がしたいとの思いから志し、信じて歩んできた警察官の道。被災地での貴重な経験を生かし、世界が認める誇り高き国民の安全な生活を守るといふ崇高な仕事に全力を尽くす所存である。